平成２５年度
大学まちづくり政策形成事業

「酒田市升田区の地域活性化に関する調査研究」

報告書

東北公益文科大学

温井 享

目次

1. はじめに 3

2. 活気のあった立ち上げの頃

－平成１２（2000）年頃のむらづくり活動－.....5

3. たけのこ採りときのこまつり 16

4. ３泊４日の公益大演習 21

5. 高齢化の進行、住民の団結と村づくり 40

6. まとめ、そして次年度へ向けて 47

１． はじめに

（１）本研究の目的

本調査研究は、酒田市八幡総合支所建設産業課からの委託によるものである。委託の趣旨は以下のようなものであった。

まず対象地域の升田は、平成１２（2000）年にから玉簾の滝のライトアップに取り組み、相当数の観光客が訪れるようになるなど、地域づくり活動に成果を上げてきた。しかし、人口減少と高齢化の結果、活動の継続が困難になりつつあり、担い手の若返りを図る必要がある。それを実現するにはどうしたら良いか、検討してもらいたいというのが１つ目の委託理由である

次に、玉簾の滝を目当てに観光客は訪れるようになったものの、ただ滝を見て帰ってしまう。これでは、ライトアップに費用と労力がかかるだけで集落にメリットがないし、活動継続の意欲も起きない。これだけ来るようになった観光客にいかに金を落してもらうか、その検討が２つ目の委託理由であった。

それから３つ目として、滝の入口に整備された駐車場の産直施設「ららら」がある。産直施設はできたのだが、集客に十分成功しているとは言えないからである。「ららら」の売り上げを伸ばすにはどうしたら良いか、それが３つ目の委託理由である。

（２）調査研究の方法

まず、現地踏査して建築や景観などの物理的資源を把握した。これは４月に、受託契約前に行っている。次に人に会いたいと思った。キーパーソンとなりそうな人とは、この４月の訪問時に会っているので、次に把握したいと思ったの

は、集落の住民が全体として今どういう思いで暮しているのかということである。全員に会うことは不可能だが、色々な組織、グループがあるだろうから、グループごとに会って話しをしてみたい、とくに今回の委託理由から、若手の住民に会いたいとお願いした。そして、村の資源に絡んだ催し、タケノコ採り、キノコ採りなどに参加することと、夏休み期間に公益社会演習を実施することで、学生たちに、若者、よそ者の視点で、升田の抱える問題を考えてもらう、以上が年度初めに立てた大まかな方針であった。

また、資料としては、平成１２（2000）年に升田集落としてむらづくりを開始したときの資料が色々と残っている。そして、その年の夏、東北芸術工科大学が行った合宿の報告書などがあり、これらを活用した。また、人口等の統計資料も参照している。

２．活気のあった立ち上げの頃

－平成１２（2000）年頃のむらづくり活動－

（１） 滝の里活性化委員会

当時の八幡町升田で村づくり活動が起こったきっかけは、昭和６０年代から検討されていたスキー場計画の中止である。この計画は、平成７（1995）年にイヌワシの営巣地が発見されたことなどもあり断念され、平成１０年に八幡スキー場整備促進期成同盟も解散している。これを受けて町は、鳥海山南麓地域活性化振興計画を策定した。この計画では、活性化の推進は地元の集落が主体で進め、町はそのための支援を行うのだということがうたわれていた。そこで発足したのが、滝の里活性化委員会である。

平成 11 年 12 月 15 日、升田区の役員に加え、若妻会、青年団、婦人会から 2 人ずつと、その他に村の有識者として 8 名が入って、20 名の住民から成る滝の里活性化委員会が発足した。活性化委員会で話し合われた活性化のための提案を表１として掲載する。

このときは活性化委員会に先行して「升田の活性化を図るための夢を語り、実現する会」も 12 月 2 日に結成されている。これは若妻会と青年団から成る組織で、その後会を重ねる中で、具体的に 2 泊 3 日の滞在メニューをつくってみることになった。このプログラムづくりには役場職員 2 名も加わっている。こうして実現したのが、翌 12 年 8 月に行われた、東北芸術工科大学を体験メニューのモニターとして迎えた体験・交流ワークショップである。このワークショップは三田教授と 15 名の学生（ほとんどは三田研究室、うち 1 名は大学院生）が参加した。このときの滞在メニューには、若手住民の活性化に対する

考え方が表れている。また、芸工大による体験・交流ワークショップ報告書には、滞在メニューを体験してみて感じた学生、教員の考え方が書かれているので、「滝の里活性化委員会」、「升田の活性化を図るための夢を語り、実現する会」、「芸工大」の３者を比較しながら、村づくり活動の初動期に、どのようなことが考えられていたのかを確認しよう。

（２）活性化に対する３者の考え方、感じ方

まず初めに、滝の里活性化委員会で話し合われた活性化策を表１に列挙する。同委員会は区の役員を中心とする会であり、年輩の男性の考え方が表れていると推測される。太字は実際にその後実現したものである。

御嶽神社例祭を PR してお客さんを呼ぶ。親睦会を盛大にしてお客さんを呼ぶ。**滝の沢川を禁漁区**にし、前の川で全国釣り大会を行う。雪上運動会、**夕方に滝のライトアップ、雪灯籠**。イベントに肉そばを出す。大台野そばを升田に誘致。東北電力に金を出してもらう。嫁対策としての交流事業。芸工大にビラを貼る。**道路整備して大型バスが入れるようにする。玉簾の滝の駐車場に簡易直売所をつくる。玉簾の滝のライトアップ（２月、８月）。**民宿経営。野草の栽培。植物の保存地をつくる。滝の沢川整備に地元の木を植え、イワナの群生地を見せる。区の観光開発費をつくり、それを財源として活動する。スキー場の充実。空家を使った５日以上の宿泊施設。クロカンのスキー合宿。

表1　滝の里活性化委員会で話し合われた活性化策

次に、升田の滞在プログラム・実体験型ワークショップの日程案を見てみよう。活性化策を分析するには限られた内容であり、滞在プログラムという特化した内容ではあるが、若妻会と青年団が中心になり考えたもので、ここから若い住民の考えをうかがい知ることができる。また、彼らが何を活性化の資源だと考えたか、何が升田の魅力だと感じていたのかも推察できる。なお、けんぞ

の家とは、集落内外の有志により維持管理されていた茅葺の民家であり、でろでろ話とは、お化けなどの怖い話のことである。

集落内散策。家族旅行村で入浴。でろでろ話。ほらふき話。けんぞの家宿泊。**鳥海山登山。**川遊び・かじかつかみ。**玉簾の滝。**そば打ち。芋掘り。バラ等升田の特産品集め。升田の良さを見つけるワークショップ。民泊。山菜・川魚収穫。野菜・バラ収穫。直売所での準備と販売体験。

表2　若妻会、青年団がつくった実験滞在プログラム

では最後に、モニターツアーとしてこの滞在プログラムを体験した学生の感想から、彼らが升田の活性化策としての滞在型観光はどうあったら良いと考えたか、あるいは升田のどこに魅力を感じたかを見てみよう。ここには、新妻会や青年団よりさらに若い人たちの感性と考え方、そして外部からの眼が存在する。

水田の景観。集落内の迷路のような道。家屋と庭（生活の様子が垣間見える魅力）。地区の人たちの暖かさ、優しさ。若者が多いこと。短い間に升田の良さを伝えたいという情熱、念入りな準備に感激したが、プログラムは盛りだくさん過ぎ、頑張り過ぎ、これでは地区の人が疲れてしまう。自分たちの生活のリズムを狂わせないよう負担にならないようしないと続けられない。もっと村の人と話がしたかった、特に民泊では真夜中に着き早朝に出発したので家の人と顔を合わす機会さえなかった。若い人が多くて話しやすかったが、逆にお年寄りと話をしてみたかった。外見とかの良し悪しも大事だが、迎える気持が大切と感じた。おじいちゃんが直売所に持って来たキタアカリがおいしかった。女の人が元気。やみくもに観光客を誘致するより、リピーターを定着させること。インターネットで広報。村の人と都市の人の出会いの場としての体験農園。住民とリピーターでのイベント企画（祭等）。施設がきれい（けんぞの家のトイレ？）。鳥海山の眺め。水のおいしさ。ホタル。最後に皆さんが見送りに公民館から出てきて手を振ってくれた瞬間、升田の素晴らしさをいたく感じた。庭にある木々や花々。カジカや山菜、採りたての野菜の夕食。笹巻きづくりのおばあちゃんの知恵。おはよう公園での昼食（風が気持ち良かった）。地域のまとま

り。前向きな発言と姿勢。デロデロ話。川遊びでのカジカつかみ（一匹も捕まえられなかったが)。「ここはいい所なんだな」ということが、升田の人たちを見ているだけで伝わってきた。ゆったりと自由な時間を過ごしてもらう。集落に続く道は細くて狭くて曲がりくねっていたけれども、それがまた風情のある景色を作りだしているようだった。Ａコース（鳥海山登山）よりＢコース（村で芋掘り)。直売体験。フラワーアレンジメント。芋掘りなどを一緒にするなかでの婦人会の方との会話。タケノコ採り。山菜採り。雪囲い・雪かき・雪下ろし。里山に遊歩道やサイクリングロード。

表3　学生が感じた魅力

さらに表４として、三田教授が評価した点と、今後の展開へのアドバイスを掲載する。

・活性化という目的が意識化されている中で行われたこと。
・施設をいきなりつくるのではなく、実験から始めた点。
・滞在型活動のゴールがもう１つはっきりしていない。
・住民が一致団結して取り組んでいる点。
・行政とも協働がうまく行っている点。
・早いうちに役割分担、人的体制を整えよ。
・優れた外部企画は受け入れ、自主企画をまずは夏に一回行うと良い。
・遊びより交流型のメニューに人気があったのは意外だが好ましい。
・地域の暮らしや生業のなかに存在する教育力。
・宿泊については、当面はけんぞの家を使いながら考える。

表4　三田教授が滞在プログラムで評価した点、今後への提案

以上のうち、表１～３の３者の活性化策の考え方、升田の魅力の捉え方を比較したのが次の表５である。まず、活性化策や魅力の捉え方を、「A. イベント型・よくある活性化案」「B. 自然の豊かさ・伝統文化」「C. 日常の生活・生業」の３つに分けて分類してみた。そうすると、年配の男性が多い滝の里活性化委員会の活性化策はＡが多いことが分かる。Ｂ、Ｃもあることはあるが、この順

	滝の里活性化委員会	滞在型プログラムメニュー（若妻会、青年団）	芸工大学生
A. イベント型 よくある活性化策	神社例祭。全国釣り大会。**滝ライトアップ。**雪灯籠。蕎麦屋誘致。東北電力に頼る。**道路広げて大型バス。**民宿経営。スキー場充実。		インターネットで広報。サイクリングロード。
B. 自然の豊かさ 伝統文化	**滝の沢川を禁漁区。**雪上運動会。植物保存地。イワナ群生地。クロカンのスキー合宿。	でろでろ話、ほらふき話。けんぞの家宿泊。**鳥海山登山。**川遊び・カジカ掴み。**玉簾の滝。**山菜、川魚収穫。	住民とリピーターで祭等企画。**鳥海山の眺め。水のおいしさ。**蛍。笹巻づくり。おはよう公園での昼食。カジカ、山菜、筍採り。でろでろ話。川遊び・カジカ掴み。
C. 日常の生活・生業	地区親睦会に誘客。イベントに肉そば。空家を宿泊施設に。**産直施設。**	集落内散策。そば打ち。芋ほり。バラ等の特産品。民泊。野菜、バラ収穫。産直で販売体験。	水田の景観。集落内の道。家屋と庭。住民の優しさ、まとまり、前向きな発言と姿勢。若者が多いこと。迎える気持ち。直売所のキタアカリ。女性の元気。村の人と都会の人の出会いの場としての体験農園。採れたての野菜。ゆったりとした時間をすごす。のんびりする。産直で販売体験。

表5　3者の活性化策、魅力の捉え方の比較

に数が減る。一方、若妻会、青年団が考えた滞在型プログラムメニューにはＡはない。これは夏という季節の限定、すぐにその年できるメニューという限定によっていると思われるが、やはりそこに彼らの志向性が感じ取れる。もっとも多いのはＢであり、とくに自然体験が多い。それは彼らが升田の魅力を自然の豊かさと見ていることの表れだと思われる。また、Ｃの日常の暮らしに関するメニューも組まれている。さて、学生の感想に目を移すと、もっとも多いのはＣである。Ｂの自然体験に感動した学生も多いが、Ｃの何気ない日常の魅力、村の人との交流が良かった事が分かる。これは三田教授の「遊びより交流型のメニューに人気があったのは意外だが好ましい」というコメントにも表れている。集落の細くて狭くて曲がりくねった道とか、家々の庭（石組、池、庭木で構成した日本庭園などではなく、草花を植え、野菜もあるような何気ない庭）とか、そういうものが魅力的などとは、住民は誰も思わなかったのではないだ

ろうか。また、住民の方々の暖かさ、優しさ、前向きな姿勢とか、人に関する感動、魅力も、学生たちの感想の特徴である。

さて、表５では、現在までに実現したものを太字で表した。すると分かるのは、ほとんどが滝の里活性化委員会で出たアイデアだということである。それは４つあるが、４つのうち２つがイベント型・よくある活性化案とした分類に入る。その中で滝のライトアップは多くの集客があり、成果を上げているが、志向性として旧来のステレオタイプの手法とも言え、単純に感心するわけにも行かない。一方、若妻会と青年団のメニューにも太字に分類したものがあるが、これは昔から在るもの（玉簾の滝）や行っていたもの（鳥海山登山）であり、確かに現在も在るし行われているので太字にしたが、新たな活性化策とは言えない。学生が感心したものにも、現在でも経験できるものがあるので太字にしたが、鳥海山の眺めとか、水のおいしさであり、これも施策と言うようなものではない。１３年後の現在、むらづくり活動の停滞が問題となり、今回の委託事業となったわけだが、その遠因は、そもそもスタート時に遡れるとも言えるのではないだろうか。活動当初、様々な志向性はあったのだが、結局実現したのはステレオタイプのものが中心で、若手住民や学生が感じた魅力は、手つかずのままで終わってしまった。では、どうしてこうなったのか。

想像できる１つ目の理由は、やはり年配の役員の案が実施されたということだろうか。ただ、そればかりではないように思われる。というのは、若妻会と青年団の滞在メニューは、常時、不特定多数を相手にする観光として行うには難しかったということが挙げられる。まして、学生が感心した内容は、暮らしの中で出会う何気ないものなので難しい。観光として行ったとたん消えてしまう、そういう種類のものだからである。

（３）平成１３（2001）年～平成１６年の芸工大三田ゼミ合宿

芸工大の学生たちは翌年以降も夏に升田を訪れた。その滞在プログラムを以下に掲載する。資料が残っているのは、平成１３年度、平成１４年度、そして平成１６年度の合宿プログラムである。芸工大の夏合宿はこの年をもって終了したが、それは翌平成１７年に八幡町が合併し酒田市となったからである。行政組織が変わって、事業も終わった。ということは、役場が大学との橋渡しをしていたということであり、集落が大学と直接交渉して進めていたのではなかった事が分かる。

○平成１３年度　８月２日（木）～４日（土）　宿泊：けんぞの家

升田ウォッチング（集落の人のガイドで集落内散策）、升田イメージマップ作り（けんぞの家）、お宅訪問（21：00から２軒に分かれて）、田の草取り、玉簾の滝沿道草刈り、同ライトアップ、交流会（イメージマップの発表会も兼ねる）、遊歩道ゴミ拾い、升田案内板のデザイン検討

○平成１４年度　８月６日（月）～８日（木）　宿泊：けんぞの家

集落めぐり、案内板づくり、農作業体験、川遊び、鳥海山山麓トレッキング

○平成１６年度　８月８日（日）～１０日（火）　宿泊：滝の里ふれあい館

村内視察、直売所「ららら」で販売活動、バーベキュー、滝ライトアップ見学、御嶽神社参道（滝沿道）草刈り、「ららら」の活用改善計画作成、川遊び、交流会（改善計画発表を兼ねる）、レクチャー：農山村の振興と課題、バラ園で農作業

平成１３年度の升田合宿の感想、三田教授の総括を表６、表７にまとめる。

ゆっくりと升田を味わうことができた。しかし、地域の方とのふれあいが減った、とくに若い人と接することが少なくなったのは残念。1 週間、もしくはもう少し長い滞在をしたい。非常に有意義だったのはお宅訪問・雑談会（地域の人とゆっくり時間をかけてお話しできた。手料理と笑顔とお話。温かさ)。役立つ活動ができた（来訪者は地域から得たいと思うだけでなく、地域に貢献したいと思うものではないか。地域の人と来訪者の心のつながり)。懐かしい感じ（11 人中 9 人が挙げる)。落ち着ける安心させる雰囲気。おいしい水。時間がゆっくり動いて時を忘れてしまうほどの自然。集落に入る前の道が、ここの風景に似合わない大きな道路になっていた。こうやって少しずつ変わってしまうのかと思った。田んぼのヒエ取り。ライトアップされた滝（一生忘れられない！)。今あるものを壊さず、新たに手を加えず、開発の波に飲まれることなく維持していって欲しい。山登りができる山や、川遊びができたり、イワナやカジカがいる川、ずっと遠くまで広がる田んぼや、曲がりくねった風情のある道、庭がきれいな家並み。年代を越えた仲間意識。新鮮な野菜。蕎麦や笹巻などの郷土料理。一緒に作業できる喜び。水田や山林、おいしい空気、川の清らかな流れ、雄大な玉簾の滝。けんぞの家を中心にした民家の趣。元気いっぱいでパワフルで色々な知識や経験を持っていて、一致団結して取り組む人たち。裸足でヌルヌルした田んぼに入り、用水路で洗ったこと。虫の声や川のせせらぎを聞きながら眠ったことや、早朝寝ぼけながら外の新鮮な空気を吸ったり、太陽の下でたくさん汗をかくことができたこと。何をするわけでもなく、景色を眺めたり、散歩したり、そんなのんびりした日を過ごすのも良いと思う。“観光地”的な扱いでなく、自分だけの“穴場”的な存在としての升田。

表6　平成13年の夏合宿で学生が感じた升田の魅力

- 昨年は地域が企画・運営したプログラムにのって動いたのに対し、今年は自主企画・自主運営をモットーとした。自炊。
- 田の草取り、沿道の草刈りでは、地元の方にインストラクターとして入ってもらわないと実行できず、自立の限界が分かった。
- 地元の負担は減ったかわりに、交流活動に参加し意識を共有できた地域住民は狭い範囲に留まった。
- 地元の関わり方は、昨年度と今年度の中間くらいが適切か。
- ２泊３日は交流には短すぎ。せめて３泊４日、１週間は欲しい。
- 田んぼ以外に、収穫体験できる畑があると活動が広がる。

表7　三田教授の総括

前節では、現在まで続いている活性化策はステレオタイプのものが多いことを指摘したが、２年目の平成１３（2001）年の芸工大夏合宿を見ると、そこで追及されているものは全く違う。滝のライトアップ見学を除けば、この年の活動はほとんど表５のＣ、日常の生活・生業に分類される。Ｂの自然の豊かさ・伝統文化に分類されるのは、鳥海山の眺めと水のおいしさであるが、これは日常的な暮らしの中で経験するものなので、全てＣであると言うこともできよう。ただし、Ｂの活動が全く放棄された訳ではない。平成１４年の合宿では、川遊び、鳥海山山麓トレッキングを行っているし、平成１６年の合宿では川遊びを行っている。ここから分かるのは、Ｃの活動を中心としながら、Ｂの活動を加味するという長期滞在の在り方を目指しているということである。Ａの玉簾の滝ライトアップも見学しているが、これは芸工大が訪れる以前の春から既に始まっていたということもあるので、それを受け入れたということもあるだろう。いや、学生たちはたいへん感動しているので、むしろこのように評価される。滝だけ見て帰ってしまうのではなく、ＣにＢを加味した長期滞在の中でライトアップを味わうという在り方を追求したという評価である。

さて、平成１３年度以降の芸工大の夏合宿が目指した目標は、今述べたようにＣの活動にＢの活動を加味するという長期滞在の追求だったが、もう１つ、自主企画・自主運営の試みも実行された。これは初年度のプログラムが住民の負担が重かったことから、そうならない方法ということで実施されたのだが、業としてグリーンツーリズムが成立するためには、あるいは交流活動にしても、日常的に定期的に行うためには、住民の負担が重くては続かないから必要な検討課題であったと言える。ただ、そこから次のような問題点が浮上している。表６の学生の感想に、地域の方とのふれあいが減った、とくに若い人と接することが少なくなったのは残念とあるように、あるいは表７の三田教授の指摘に、地

元の負担は減ったかわりに、交流活動に参加し意識を共有できた地域住民は狭い範囲に留まったとあるように、初年度の村を挙げての歓迎、参加という熱気が消えてしまったのである。これは検討すべき課題である。今回の委託理由に、担い手の高齢化に伴う活動の低下を打開するために若返りを図るためにどうしたら良いか、というものがあるが、これもそもそも平成１３年からあった課題ではないのか。高齢化以前に、初年度の熱気、村を挙げての取り組みは、２年目から冷めてしまったのではないか。そうだとすればその理由はどこにあるのか？

平成１３年の合宿の感想、学生たちが感じた升田の魅力を見てみよう。まず目に付くのは、のんびりと日常の升田を楽しむのが魅力であるという感想である。それは「何をするわけでもなく、景色を眺めたり、散歩したり、そんなのんびりした日を過ごすのが良い」という感想に端的に表れているが、虫の声や川のせせらぎを聞きながら眠るとか、寝ぼけながら外の新鮮な空気を吸うとか、太陽の下でたくさん汗をかくとか、本当に日常そのものの感動に表れている。それが、懐かしいという升田のイメージに繋がるのだろう。体験作業も、裸足で田んぼに入って行ったヒエ取りが人気である。また、地域の方のお宅を夜訪ねての雑談会も多くの学生が楽しかったことに挙げている。人とのふれあいが大事なことが分かるが、これは施設建設など金のかかる観光振興とは違って、その気さえあればできることだ。観光して自分が楽しむだけでなく、地域に貢献するところまで行かないと、訪問者にとっても真の満足は得られないのではないかという指摘は新鮮である。

（４）まとめ

現在実現している活性化策である玉簾の滝のライトアップ、そのための駐車場整備とそこに開設された産直施設「ららら」、廃校になった小学校を利用し

た宿泊施設「滝の里ふれあい館」、これらは村づくりの活動が始まった平成１２（2000）年に当初から目指されたものとは単純には言えない。こうした活性化策を提案したのは、主として年輩の男性からなる「滝の里活性化委員会」であった。一方、住民の若手から成る「升田の活性化を図るための夢を語り、実現する会」が考えたのは、自然の豊かさや伝統文化の魅力であった。そして、夏休みに訪れた東北芸術工科大学の学生が感じたのは、升田の日常の生活・生業の魅力であり、住民の人たちとの交流自体に感動している。

こうして見てみると、今回の委託事業の目的である、玉簾の滝や産直施設から経済効果を引き出すという設定が、そもそも妥当かどうか疑問符が付いてくる。実現できなかった自然の豊かさや伝統文化、日常の魅力についても改めて考える必要があるし、逆にそこまで遡らないと経済をどう回すかという問いに答えを出せないのではないかと思うのである。

次に、担い手の若返りを図る方策という２番目の目的についても、単純に考えて良いのか、こちらも疑問符が付く。平成１２（2000）年に芸工大の学生を迎えたとき、彼らが驚くほど多くの住民が参加し、若者も大勢いて、活気にあふれていた。しかし、これは１年限りであった。夏合宿を自主企画・自主運営型にしたこともあるが、平成 13 年以降の村づくりは、一部の人たちだけしか関わらなくなってしまっており、その理由を明らかにする必要がある。単なる若返りでは済まないと思うのである。

３． たけのこ採りときのこまつり

升田における現地調査として、たけのこ採りを行い、きのこ祭に参加した。升田で行われる催しのうち、観光を意識したイベント（活性化策）には以下のようなものがある。4/28（日）～5/6（日）：滝ライトアップ、6/16（日）：たけのこまつり、8/12（月）～19（月）：滝ライトアップ、11/3（日）：きのこまつり。(平成 25 年度)

したがって、きのこまつり参加は、活性化策である観光イベントを見たことになる。一方、たけのこまつりには参加できなかったが、代わりに集落の方に、山にたけのこ採りに連れて行ってもらった。これは前節の分類ではＢにあたる升田の豊かな自然体験と言えよう。

（1） たけのこ採り

6 月 16 日（日）に「産直ららら」の駐車場で行われた「たけのこまつり」には参加できなかったが、池田善幸さんにタケノコ採りに連れて行ってもらい、採ってきたタケノコの皮を剥いてタケノコ汁を食べた。

日程：6 月 8 日（土）8:30 池田バラ園出発、採集現場到着（車を道端に駐車）9:15、採集開始 9:30、場所を移動し山の中で昼食 12:00、下山し池田バラ園到着 14:00、皮むき、タケノコ汁調理、タケノコ汁会食、解散 16:00 頃

参加者：池田善幸さん、佐藤富弥さん（自治会長)、小野芳春課長、後藤重明課長補佐、学生１人（３年生)、温井

写真1　県境近くまで上る

写真2　雪渓の残る新緑

写真3　ブナ

写真4　ヤブ

写真5　道端のふきのとう

写真6　フキの葉をコップに加工し湧水を飲む

写真7　山で昼食

写真8　野草

写真9　皮むき

写真10　タケノコ汁

池田善幸さんに連れて行ってもらったのは秋田県境近くの山である。昨年は写真２のように雪解けが遅く、たけのこもまだあまり出ていなかった。採集地は自動車道から少し歩いたところで、植生は高木がブナ（写真３）、低木がネマガリタケの藪（写真４）となっている。たけのこ採りとは、このネマガリタケの藪を掻き分け、ちょっと顔を出したたけのこを探すのである。鬱蒼とした藪を掻き分け行う作業なので、これを面白いと思うか好みは分かれるだろうが、筆者などはたいへん面白かった。池田さんはこの後、ある会社社長に乞われ、たけのこ採りを案内したところ大変喜ばれ、来年も是非頼むと言われたそうである。同好の士はいるものと思われる。観光としても成り立つのではないか。

ただし、現在たけのこ採りをしているのは、中高年に限るようで若者はいないようである。遅めの出発であった我々が往きの道すがら見かけたのは、もう採り終わって、車の脇で持参したおにぎりなどを食べている人達だった。そして、それは皆中高年であり、若い人はいなかった。

我々の場合は、採集を終え帰る途中、山の中で昼食をとった（写真７）。道端にはフキノトウが花を咲かせ（写真５）、湧水ではフキの葉を曲げてコップのようにして水を飲む方法を池田さんから教えてもらった（写真６）。

池田さんのバラ園に帰ってから、採ってきたたけのこの皮を剥き、たけのこ汁を作って食べた。池田さんや自治会長の佐藤さん、市役所の小野課長、後藤さんとお話しながら行った作業、食事のひとときはとても楽しかった。参加した学生もたいへん楽しんだようである。

芸工大の合宿でたけのこ採りは平成１２（2000）年に行われただけであるが、このときのプログラムは住民若手がつくった。これは豊かな自然の魅力と言えるが、今回は皮を剥いてたけのこ汁を一緒につくったので、これは地域の方々との交流・会話であり、前節の分類ではＣの日常の生活・生業の魅力に分類されるだろう。たけのこ採り自体も、池田さんの場合には夕方仕事を終えた後、その日の晩御飯用にと、さっと山に入って採ってくることもあるという。そうなると、全くの日常の暮らしの中にたけのこ採りがあり、山村でなければできない暮らしであり贅沢であると感じる。

（2）　きのこまつり

１１月３日（日）１０:００～１４:００　産直ららら駐車場

参加：小野課長、後藤課長補佐、学生２人（3 年）、菊地亮哲非常勤講師、温井

１１月３日に「きのこまつり」ということで升田を訪れた。きのこまつりは玉簾の滝の入口にある駐車場にテントを２張出して行われていた。このテントと産直販売所「ららら」が会場である。並んだ品は、主役のなめこと白菜、大根、カラトリイモなどの野菜であった。ただ、量が少なく、きのこまつりと言うには少し寂しく、客も賑わうと言うほどはいなかった。

写真 11　きのこまつり会場

写真 12　なめこに野菜も

写真 13　自治会の芋煮会

同時開催　自治会の芋煮会：１２：００～１５：００　升田公民館

この日は午前中から自治会の消防訓練が行われ、午後は芋煮会が行われた。写真１３はその様子である。催しが分散されたため、きのこまつりは閑散としたとも言えるが、実態は次のようであろう。きのこまつりは産直ららららの販促活動であり、したがって組合員である数人の住民だけが関わる。その他の住民は関係しない。この年の芋煮会がきのこまつりと同時開催になったのは偶然だというが、両者が別々だからこそ同時開催できたわけである。

平成１２（2000）年に芸工大学生が訪れたときには、最終日の午前中が農産物の直売活動であった。このときは住民と学生が一緒に販売を行ったが、売り手の方が買い手より多いような状況で活気があったそうである。それが平成１

６年に産直ららがオープンすると、組合員だけのものになり、集落を挙げて取り組むということがなくなってしまった。これでは集落の事業とは言えないし、升田の活性化策とも言えないのではないか。

（３） まとめ

実現した活性化策の例として「きのこまつり」を見学した。これはハード事業としては、平成１６（2004）年、玉簾の滝の入口に駐車場を整備して産直施設ららを設けた事業である。そしてソフト事業としては、その運営を集落住民の中に組合員を募って行っている事業である。年２回、春のたけのこまつり、秋のきのこまつりと、２度の売り出しで販促活動を実施している。その秋の販促活動を見学したわけである。産直ららについては、産直としての規模が小さく、販売額も集客も少なく、滝を見に来た人も素通りしてしまうという課題を聞いていた。確かにそうだろう。しかし、この日視察して、また芸工大の報告書を読んで感じたのは、かつて一度は、大勢の住民が出て村を挙げて販売したこともあるのに、現在は数人の組合員だけに任せていることである。これが閑散としている理由であり、ここに問題があるのではないか。同時開催で自治会の芋煮会が行われていたのは象徴的だった。

たけのこ採りは魅力的なハイキングだった。今は若い人が行かないが、十分農山村観光の目玉に成り得るのではないだろうか。採ってきた後、皮を剥いて、たけのこ汁をおしゃべりしながら一緒に作ったのは楽しかった。これは平成１２（2000）年に若手住民がつくった滞在プログラムにあったメニューであり、学生たちにも人気のあったメニューである。これをどう展開し、升田の暮しの魅力として確認し、交流人口の拡大につなげ、升田に暮らす意味の１つとして位置づけることが求められる。

４．　３泊４日の公益大演習

（公益大３年８名、山形大２年１名参加）

平成１２（2000）年から平成１６年にかけて、東北芸術工科大学の学生たちが夏に訪れ、合宿する中で、升田の魅力を見出した。それに対し今年度は、東北公益文科大学の学生が升田を訪れたが、若干違いがある。自炊であるところは平成１３年以降の芸工大合宿と同じだが、１日多い３泊４日の滞在をした。また、公益大の合宿は単位になる演習だったので、基本的に現状分析と、改善のための提案をするということを課した。それに対して芸工大生は、滞在型の体験交流プログラムのモニターとして呼ばれたのが最初であったから、用意されたプログラムの良し悪し、升田の魅力とは何か、それを体験によって感覚的に捉え、レポートした。

演習のシラバスを次ページに掲載する。今回の委託研究の目的でもある担い手の若返り、しかし升田の若者は升田に暮らすことに積極的な意義を見出していない現実、それを演習でも取り扱えないかと思い、若手住民を招いての懇親会を初日にしている。「人・農地プラン」は、将来の水田耕作の担い手をどうするか、大規模耕作できるよう水田をまとめることができるか、話し合い計画するものであるから、むらづくりを考える演習として扱うのに良いだろうとシラバスでも触れている。また、玉簾の滝のライトアップや、産直ららへの提案は、酒田市や地元から望まれていた。それからアンケートを事前に全戸配布し、演習の中で回収したが、それは回収時に住民の屋敷内に入り、場合によってはコミュニケーションする機会も生まれるのではとの期待もあって実施した。

シラバスに続いて、学生の作品、アンケート、そして演習の様子を掲載する。

育成するスキル

コミュニケーション・発信力	読解力	数量的スキル	論理的思考力	自己表現力	情報リテラシー	国際感覚	語学力	人と社会への関心	世界への関心	地球への関心	創造力企画力	柔軟性	課題発見力	問題解決力	リーダーシップ	チームワーク	傾聴力	主体性	マネジメント力
○			○	○	○			○			○	○	○	○		○	○	○	○

開講時期

公益社会演習 a･b　　温井　亨、菊地亮哲　　前期集中

【テーマ】

農村観光を含む新しい営農による集落の将来像の形成

【演習概要】

酒田市八幡地域升田地区において 3 泊 4 日の合宿形式で行います。同地区は市内では雪の多い山村で、玉簾の滝や山菜、茸等の豊かな資源に恵まれているものの、過疎化高齢化が進んでいます。村には若手の住民の方も居ますが、山村に住む積極的な意味づけをなかなかは見出せていない現状と見受けられます。現在、水田の集積や集落営農などを含めた将来の営農計画を策定する「人・農地プラン」が進行中ですが、議論しているのは親の世代です。将来の農業を担うのは若い人たちだと思われますが、今、若い人たちは農業に従事していないからです。この演習では若手住民の方々との交流、聞き取り、アンケート、現地踏査を通して、村の資源を生かしながら営農していく山村の暮らしの将来像が描けるか共に考えます。そしてその結果をパワーポイントの作品としてまとめます。

【演習のねらい・到達目標・スキルの育成方法】

村に住む若い住民との交流を通して、山村の現状を理解し、人に説明できるようになること。山村の様々な資源の魅力を感じとり、対象化して表現できるようになること。

【授業計画】

1 日目：９月１０日（火）

① 課題説明、村落の概要説明、芸工大が行った地域起こし資源マップの説明、②村落内視察、③玉簾の滝ライトアップ準備。住民の方、酒田市担当者と懇親会

2 日目：９月１１日（水）

④⑤アンケート回収と聞き取り調査、⑥⑦⑧村落内調査

3 日目：９月１２日（木）

⑨⑩補足調査と調査結果のまとめ、⑪⑫⑬調査結果のまとめと発表準備、⑭発表会

4 日目：９月１３日（金）

⑮まとめ

【評価方法】

調査やアンケート分析の取り組みの様子。発表会でのプレゼンテーション。パワーポイントの作品。以上によって評価します。

【その他（テキスト、参考書、注意事項等）】

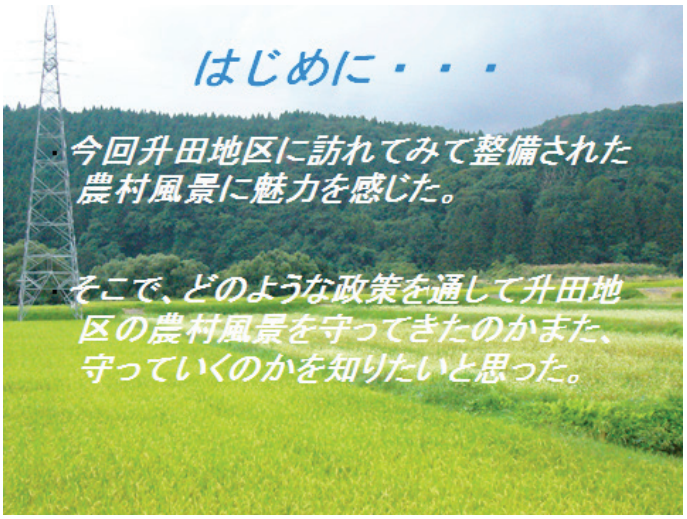
・今和次郎「日本の民家」岩波文庫
・姫田忠義、他「山に行かされた日々」はる書房
・東北一万年のフィールドワーク「八森」「上郷」他、東北芸術工科大学東北文化研究センター

【受講生への一言】

詳細な全体スケジュール、宿泊場所、合宿に必要なもの等は別途指示します。

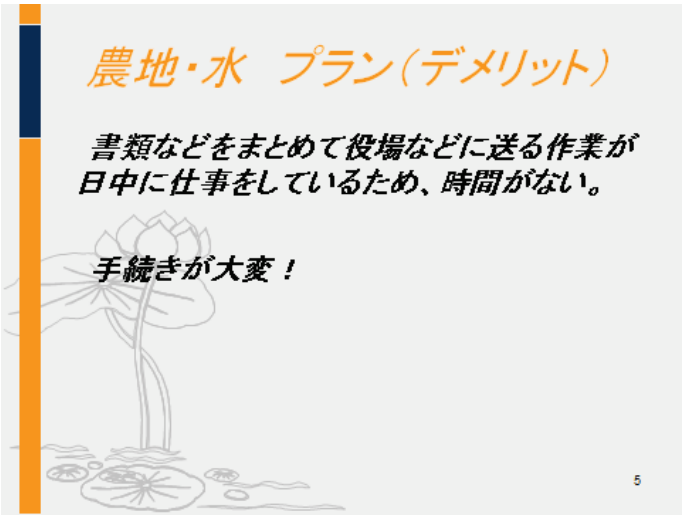
○A 班

農地・水プラン
c1110074 阿部 翼
c1111300 星澤 夏生
c1111398 山川 渓太


はじめに・・・
・今回升田地区に訪れてみて整備された農村風景に魅力を感じた。
そこで、どのような政策を通して升田地区の農村風景を守ってきたのかまた、守っていくのかを知りたいと思った。

農地・水 プラン
概要
国からの補助金で、農地の維持、管理、美化
3

農地・水 プラン（ポイント）
・国が関わる。
・事務的なものや、手続きが大変。
4


農地・水 プラン（デメリット）
書類などをまとめて役場などに送る作業が日中に仕事をしているため、時間がない。
手続きが大変！
5

農地・水 プラン（改善策）
研修により人材育成＝ソフト面にお金をかける
よって・・・
農地・人 プラン
6

農地・人　プラン

農地・人　プランには、様々なものがあります。その中でも・・・

担い手・後継者不足が現状である

7

農地・人　プラン（ポイント）

- 生産としての収入はいいが、農業機械や肥料などで引かれ、赤字になるケースもある。

若者(後継者・新規農業者)への不安に繋がるのでは・・・

8

農地・人プラン（改善策）

- 第一次産業を第二次、第三次と広げ、最終的に第6次産業にすること
- 新規農業者は、150万程度の補助金が出る

9

感じたこと

・冬場の収入のことも問題ではないか？

- 生活する上で、不便なのではないか？（コンビニや買い物等）
- 地域交流の不安（知らない土地だと尚更）
- 独身で農業の経営は容易ではない。親の世代は、子供に期待を持たなくなったのではないか？

10

まとめ

農業についての知識がなかった私達だったが、この三泊四日の演習で勉強させていただき、知識をつけることができた。

その中には数多く問題点があった。その改善点もあり、今尚様々な考えを模索している。

11

○B 班

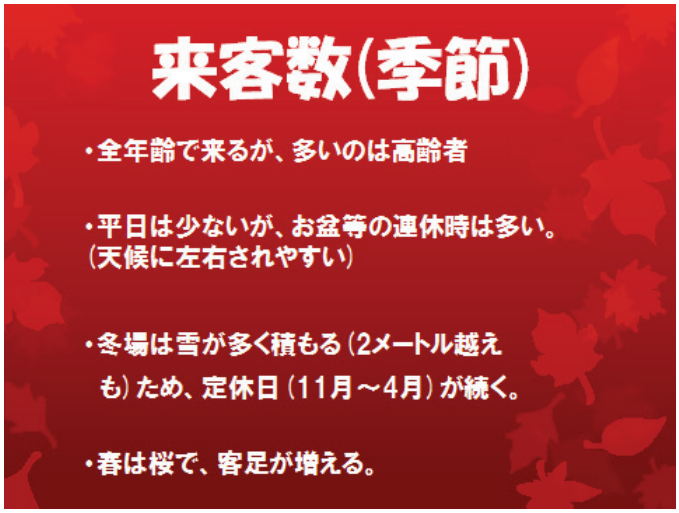
産直ららららの現状と課題
C1110217 稲村洋樹
C1111346 宮崎元貴
C1111205 野口彰太

歴史
・平成16年4月（八幡時代）河川整備によってオープン。
・命名募集により、余目の方の名が採用された。

人気商品
酒田名物 むきそば
むきそばの作り方

特に人気!
さと吉
黒蜜アイス
バニラアイス・みたらし・黒蜜
とっても甘い♪

その他商品
ぜんまい・くるみ・あずき・瓜など
↓
かつては中国産のものを売っていたが、地元住民の声により、升田でのみ作られた農作物のみ販売している。
升田産野菜


来客数(季節)
・全年齢で来るが、多いのは高齢者
・平日は少ないが、お盆等の連休時は多い。（天候に左右されやすい）
・冬場は雪が多く積もる（2メートル越えも）ため、定休日（11月～4月）が続く。
・春は桜で、客足が増える。

立ち寄れる場所

玉簾の滝

↓

釣りバカ日誌のロケ地になり紹介された。

再現→

課題

運営状況が厳しい！

↓

労働力が圧倒的に不足している。

↓

若者の力がほしい

↓

今後、升田地区にどのように若者へと呼び込みをかけ、升田に活力を与えるか？

提案

若者を住みやすくする体制をとる

↓

景観（施設）の変化が必要
（※スーパー、コンビニの建設）

↓

遠出しなくて済む

↓

升田に住むメリットが生まれる

※イメージです

反省点

- 今回の反省点として調査不足であったため、産直ららの運営の取り組みについて学ぶには情報が足りないものとなり残念な結果となった。
- 産直ららの運営代表の村上さんにお話を伺いに行ければよかったが、予定が合わず断念せざるを得なかった。
- 升田に訪れる観光客、車など年間でどれほどくるのかデータがあればグラフにまとめることができ、簡潔に伝えることができたと思う。今回は伝わりにくいものとなってしまったのが残念だった。

○C 班

升田のいいところ
～女子大生の感じた升田～

鈴木茉衣子
伊藤璃菜
久間木美咲

升田の魅力

- 地域のつながりが深いところ
  - 老人会・子どもを外に出しても誰か見てくれる・おすそわけ・防犯
- 自然が豊か
  - 空気がきれい・水がおいしい・虫がたくさん
  - 子供と老人にはいいところ
- 玉簾の滝・鳥海山がある

升田の課題

- 人口減少
- 少子高齢化
- 交通の便の悪さ
  - 市街地まで遠い
  - 利用できる公共交通機関が少ない
  - 冬は雪が多い

提案

地域に人が入ってくることが必要

観光客
学生
お嫁さん
お婿さん

提案

- イベントの実施
  - 写真やイラストコンテスト
  - 山菜取りツアー…など

観光客向けに

提案

・むらコンの実施

お嫁さん
お婿さん

提案

学生

- 学習の場として提供
  - 小学生の遠足・林間学校
  - 小さい子がからだを使って遊ぶ場
  - 大学生がまちづくりを考える場
  - 芸工大の映像学科の人に映像の題材

まとめ

- 日常の中に隠れているたくさんの魅力、資源、可能性
- 実行する力

東北公益文科大学　公益社会演習　アンケート

升田区の皆様

東北公益文科大学では、升田地区の持続可能な村の在り方を探る演習を行います。それに伴いアンケートを実施したいと考えております。お忙しいところ恐縮ですが、以下の設問にお答えくださいますでしょうか。なお、９月１１日（水）午前中に、学生が回収に伺いますので、それまでにご記入ください。ご協力、よろしくお願い致します。

以下の設問の選択肢をお選びください。複数の選択が考えられる場合は、複数の選択をして結構です。また、その他の（　）、設問 15 ではご自由にお書きください。

1. **年　齢**　２０歳代、３０歳代、４０歳代、５０歳代、６０歳代、７０歳代、８０歳以上

2. **性　別**　ア）　男　　イ）　女

3. **配偶者**　ア）あり　イ）なし

4. **職　業**
   ア）学生　　イ）会社員　　ウ）団体職員　　エ）公務員　　オ）パート・臨時雇用
   カ）農業　　キ）自営　　ク）無職・年金で生活

5. **お宅の農業生産について**
   ア）米を出荷　イ）米を産直で販売　ウ）米を自家用に生産　エ）野菜・果物等を出荷
   オ）野菜・果物等を産直で販売　カ）野菜・果物等を自家用に生産

6. **ご自身の農業との係わりについて**

   ア）専業　イ）兼業（稲作）　ウ）兼業（畑作）　エ）手伝い（田植え稲刈り時等）　オ）なし

7. **自分の家の農地の場所が分かりますか？**　ア）はい　イ）いいえ

8. **自分の家の山林の位置が分かりますか？**　ア）はい　イ）いいえ

9. **地区の共有林の位置が分かりますか？**　ア）はい　イ）いいえ

10. **将来にわたって升田に永住しますか？**
    ア）はい　　イ）いいえ　　ウ）分からない

11. 前の設問で、イ）いいえ、ウ）分からない、と答えた方にお尋ねします。移住の機会として考えられるものをお答えください。

ア）結婚を機に　イ）子どもの教育を機に　ウ）職場に近い所に　エ）生活が楽で便利な所に
オ）高齢で住めなくなって　カ）その他（　　）

12. 升田に住まわれている理由についてお答えください。

ア）生まれた家があるから　イ）結婚した配偶者の家が升田だから　ウ）生活の糧があるから
エ）自然が豊かだから　オ）文化や人間関係の魅力から　カ）その他（　　）

13. 今年したこと、する予定のあることをお答えください。

ア）山菜採り　イ）タケノコ採り　ウ）茸採り　エ）栗拾い　オ）魚とり
カ）山歩き・登山　キ）星を眺める　ク）蛍を眺める　ケ）野草観察　コ）玉簾の滝を見に行く
サ）玉簾の滝ライトアップを見に行く　シ）その他（　　）

14. 升田は将来どのようになると想像されますか？

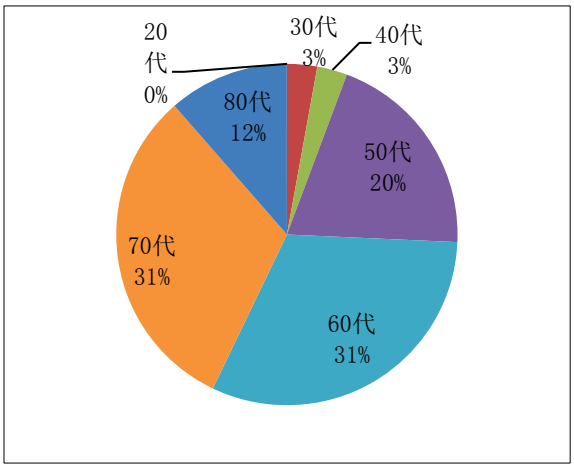
ア）今と同じような暮らしが続いていく　イ）少数の専業農家が企業的な農業経営を行う
ウ）農家民宿・農家レストランで副収入を得る農家が増える
エ）豊かな自然や文化を求めて来る新住民が増える　オ）別荘として一時的に住む人が移住してくる　カ）高齢者がほとんどの限界集落となる　キ）誰もいなくなり消滅集落となる
ク）その他（　　）

15. 升田の将来についてお考えのことがあれば自由にお書きください。

ありがとうございました。

連絡先：東北公益文科大学温井研究室　Tel.0234-41-1283　Fax 0234-41-1191　nukui@koeki-u.ac.jp

１．　回答者の年齢層

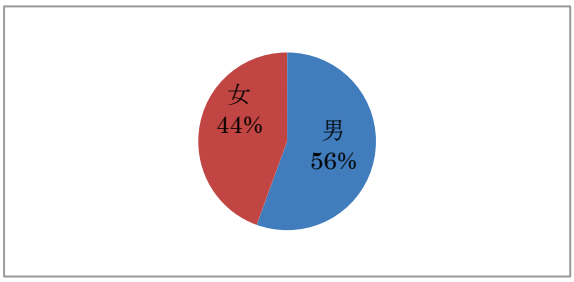


回答者の年齢は 60 歳代、70 歳代が多い。両者あわせると 62%になる。

50 歳代もあわせると 82%である。

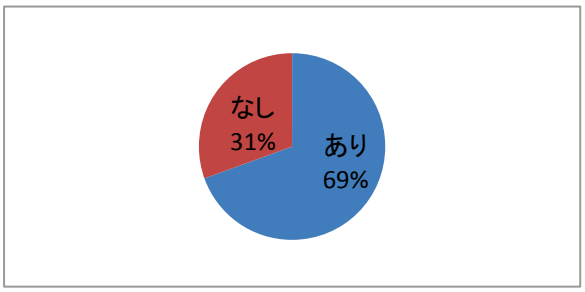
一方、若い人には答えてもらえなかった。20 歳代はゼロ、50 歳未満では全てあわせても 6%（2 人）しかいない。

２．　性別



男性が 56%（20 人）、女性が 44%（16 人）だった。

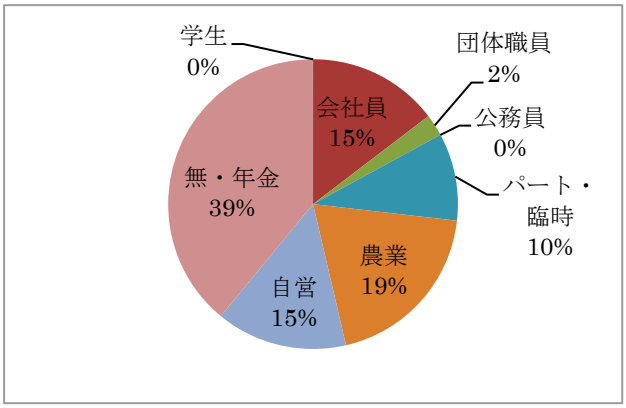
３．　配偶者



配偶者のある人が 69%、ない人が 31%になっている。

ない人の内訳は、結婚していない人、配偶者を失った人の双方がある。

４．　職業（複数選択あり）

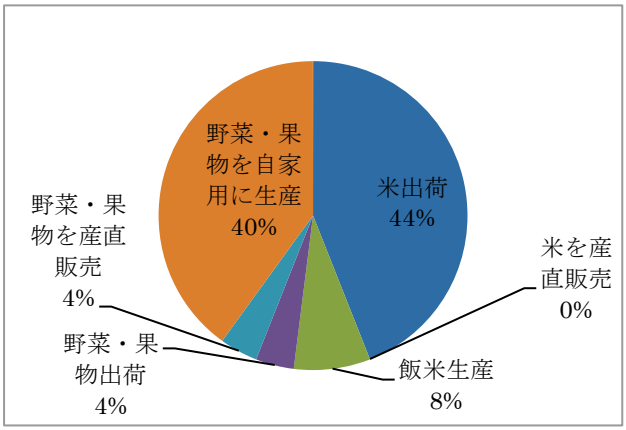


農業や自営は、それぞれ 19%（8 人）、15%（6 人）となっていて、あわせて 34%（14 人）ある。

一方、会社に勤めに出ている人は 15%（6 人）である。

無職・年金で生活と答えた人は 39%いて、高齢化が進んでいることが分かる。

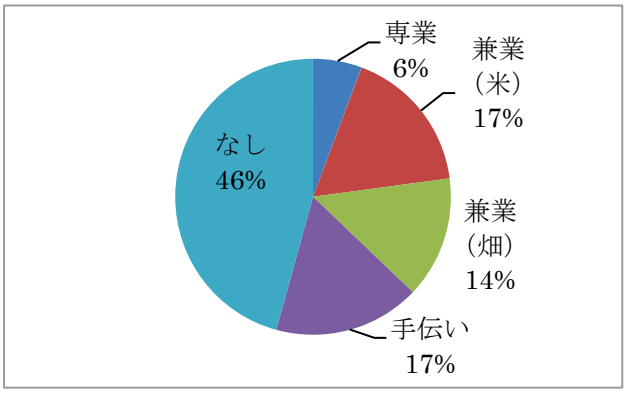
５．　お宅の農業生産について



米を出荷していると答えた人は 44%（11 人）、産直販売している人はいない。飯米として生産している人を加えても 52%（13 人）だから、半数弱の人は升田でも米を買っていることになる。

自家用に野菜・果物をつくっていると答えた人は 40%（10 人）であり、升田では米づくりをしている人が半分、自家用にしか作っていない人が半分とおおよそ言える。

６．　ご自身の農業との係わりについて

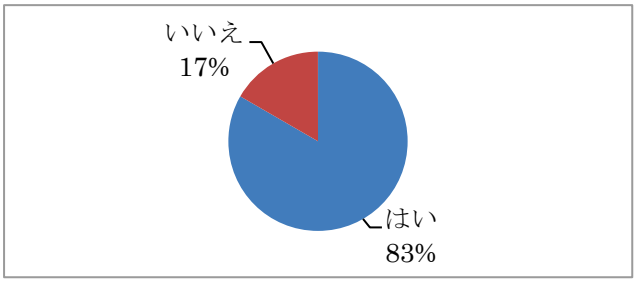


専業と答えたのは 6%（2 人）であり、兼業が多い。

手伝いとは、田植えや稲刈りの時だけという人を含む。

なしと答えた人が 46%（16 人）あるが、集計表に遡りチェックすると、70 歳代、80 歳代は少なく、高齢が理由の例は少ない。

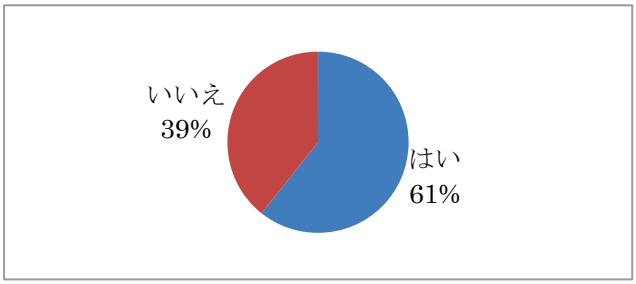
７．　自分の家の農地の場所が分かりますか



いいえと答えた 17%（5 人）の内訳は、女性が 3 人、男性が 2 人だった。

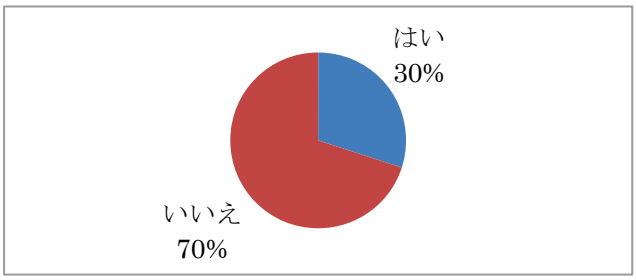
女性は水田の、男性は畑の位置が分からないということだろうか？

８．　自分の家の山林の位置が分かりますか



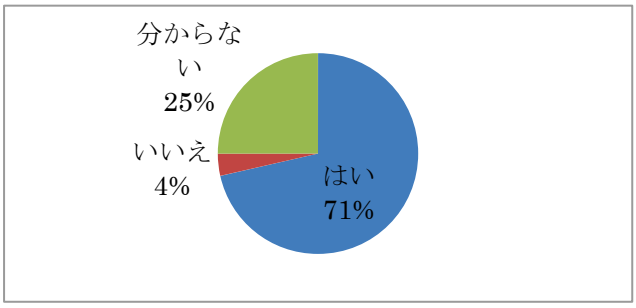
分からない人も多い。(17 人に対して 11 人)

９．　地区の共有林の位置が分かりますか



分からない 2 人の方が倍近くいる。(はいが 9 人、いいえが 21 人)

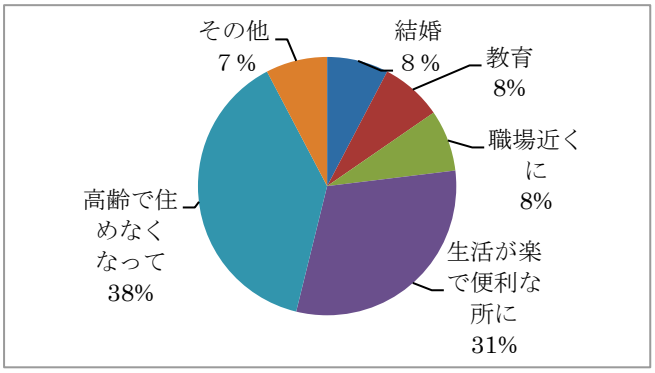
１０．　将来にわたって升田に永住しますか



20 人が住み続けると言っていて、移住と言ったのは 1 人だけである。

しかし、分からないと 7 人が答えている。

１１．　前の設問で、イ）いいえ、ウ）分からない、と答えた方にお尋ねします。移住の機会として考えられるものをお答えください。



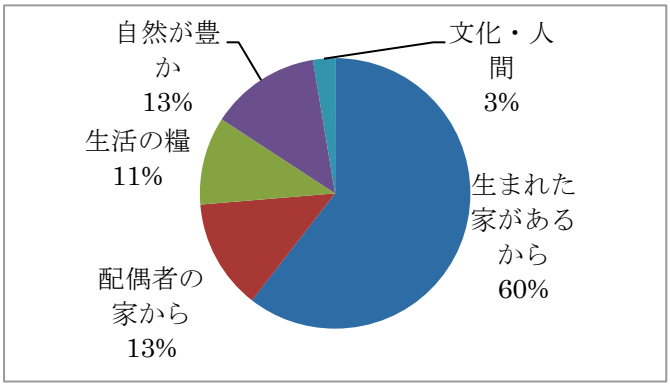
結婚、教育、職場という想定されそうな回答は１人ずつだった。

生活が便利な所にという漠然とした選択が４人と多かった。

高齢で住めなくなって移住という選択も５人あった。

その他の１人は、雪の処理が大変だからと答えている。

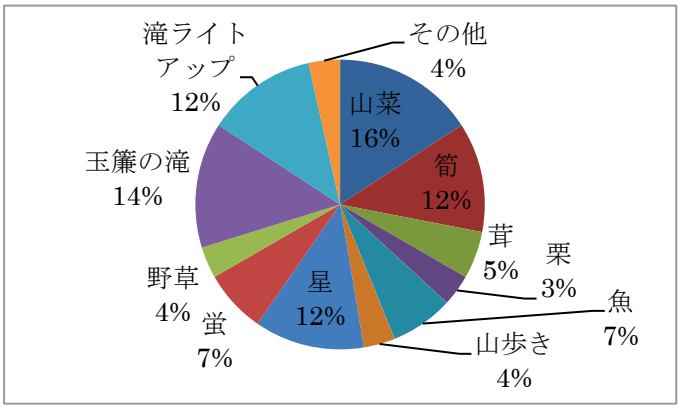
１２．　升田に住まわれている理由についてお答えください。



家があるからが合わせて 73%（28 人）、生活の糧があるからも合わせると 84%（32 人）とほとんどになる。

自然が豊か、文化や人間関係と言う升田の魅力を挙げた人は６人だけだった。（5 人は自然）

１３．　今年したこと、する予定のあることをお答えください。

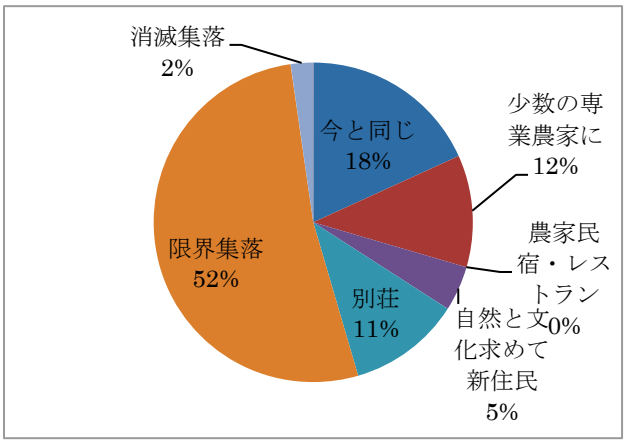


山菜が一番多く９人、ついで筍の７人となっている。

星（蛍も？）は何もせずとも見る気になれば見えるだろう。

ライトアップも含め、玉簾の滝を挙げた人は、15 人あった。

１４．　升田は将来どのようになると想像されますか？



今と同じような暮らしが続いていくという選択肢を選んだ人が 8 人いるが、願望だろうか。

少数の専業農家による企業的経営は 5 人が選んでいる。

自然や文化を求めて新住民が増えるは 2 人、別荘を 5 人選んでいる。興味深いのは、農家民宿や農家レストランによって副収入を得るという答えはゼロだったという点である。

もっとも多いのは限界集落の 23 人、村が消滅すると予想している人も 1 人いた。

１５．　升田の将来についてお考えのことがあれば自由にお書きください。

- 息子夫婦が酒田に住んでおり、忙しいときは手伝ってくれる。
- 今人がへっているのに将来なんてみこみがない。ただ毎日毎日を楽しくくいのない日々をすごして行けたら良いと考えます。将来と言う言葉じたい考えてもいません。
- 冬期の生活環境が厳しい。特に除雪（建物の雪下ろし）が大変です。以上の事から子孫の将来に苦労をさせたくない。別紙（升田の年齢別人口構成図）参照。
- ○自然を大切に助けあいながら生きていけたらいいと思います。○隣り近所の協力を大切にして生きていきたい。
- １．各大学からのこのような企画は 3 度目になります。前回の調査・討論方向性を取り込んだ今回の持続可能対策となれば有難いです。２．升田地区の山、田、川、滝、鳥海山は変わらず存在しています。変わったのは人間の生活、仕事、考え方でしょうか。子育てまで、効率優先社会、高度な仕事内容、情報選択の困難さ、長時間労働等々で生物としての人間の方に心身の不健康がきているようです。３．升田で、自分の人間性に気づき穏やかな時間を取り戻せそうです。「滞在型升田の暮し」「自分を見つけた升田の暮し」「採れたてづくしの升田ぐらし」「自然相手の遊び満載の-升田-」４．ふれあい館をワンルームアパートのように賃貸したり、鳥海山荘の風呂にも行きながら升田採れたての野菜、米、魚で短期滞在ワールドができそう。

５．心の元気がもどり、学校や会社、仕事場にもどれるようになる！！「升田だからできる」ものだと思う。どうぞまず滞在してみては。大型ポスターをつくって全国市町村に配るのは、何十年前も提案したところでした。

- 人口は少なくなるだろうが、自然在り、空気、水が有り、いつまでも残るだろう。冬は雪が有りこまります。
- 高齢化が進み冬期間の生活が心配。

○升田の概要説明、集落内散策

写真 14　自治会長さんの説明

写真 15　集落内を見学*

写真 16　ソバ畑を歩く*

○玉簾の滝ライトアップ、懇親会、三食を自炊

写真 17　ライトアップした滝で*

写真 18　地域の方とバーベキュー

写真 19　皆で自炊

○食事、作品制作、公民館での発表会

写真 20　食事風景

写真 21　発表の準備

写真 22　公民館で発表*

＊：池田久浩さん撮影

○まとめ

・若手住民

若手住民との交流を図ったが、懇親会に来てくれたのは青年団長 1 人でうまくいかなかった。

・学生の提案

学生の取り組みはテーマの選び方で、うまく行ったグループと、うまく行かなかったグループに分かれた。「農地・水プラン」と題して発表したグループは、そもそもタイトルからして「人・農地プラン」と「農地・水保全管理支払交付金（平成 12 年度までは、農地・水・環境保全向上対策）」を混同している。聞き取り調査を行ったが、農水省の制度に通じていなかったことと、こうした調査をした経験がなかったため、突っ込んだ聞き取りができなかったようである。聞き取りの成果を地図上に落とす、さらにそれを現地で確認するところまで本来は望みたい所。このテーマを扱うには、日本の農政と農村の現状に対する知識があることが前提だろう。それが足りなかった。

「産直ららの現状と課題」と題したグループも、難しいテーマを選んだ。産直の経営改善を提案するには、まず庄内の産直の比較研究を行い、うまく行っているところ行っていないところを抽出して、その要因を分析すべきだろうが、今回の演習で行うのは無理であった。販売員の人にだけの聞き取り調査では不十分である。組合員が数人しかいないのだから、全員にお会いすることはそれほど難しくなかったはずだし、その畑を訪ねることもできたはずである。季節季節にどのような作物を作っているかなども聞き取れたことだろう。

もっとも成功したのは「升田のいいところ～女子大生の感じた升田」と題した発表を行ったグループである。提案はステレオタイプであったが、このグル

ープの良かったところは、芸工大生と同じように、自分たちが何に感動したのかをテーマにしたところである。スケッチで表現するという方法は、芸工大生も行わなかった。

学生たちに現状改善の具体策まで提案までさせるのは難しい。一方、彼らが得意とするのは、若い感性、余所者の感性で、升田の魅力を指摘できるところであり、問題点を指摘できるところである。芸工大生も一度、平成 16 年に、産直ららの活用改善計画を作成しているが、どのような計画ができたのか？おそらく現実的、有効な計画は提案できなかったのではないかと思う。

・アンケート結果

さて、アンケートからは以下のことが分かる。

まず、回答してくれたのは高齢者が多かったが、そうした人でも自分の所有する山林の位置が分からない人が 4 割、共有林だと 7 割が分かっていない。米を出荷している家は 4 割強、後は自家用生産であるが、飯米を作っている家が８％、自家用の野菜を作っている家が 4 割であり、産直販売という新しい形態の農業をしている家は全くなかった。高齢の回答者であるから、升田に住み続けたいと言うのは当然だが、そう答えなかった人も 8 人いて、生活が楽で便利な所にを選んだ人が４人、高齢で住めなくなってを選んだ人が５人いる。雪でたいへんなのだと推察される。自然や文化を升田に住んでいる理由として挙げている人は少ない。そのためか、将来農家民宿や農家レストランで副収入を得る家が増えると答えた人はいない。５割以上が限界集落を予想している。

・升田の風景の魅力を具体的に分析すると

芸工大生が書いた「曲がりくねった道の魅力」「庭と家屋の魅力」とは、さらに分析するとどのようなものだろうか。今回学生が作業しているあいだに筆者も集落内を歩き、それを考えた。そこで見つけたのは、以下の２点の空間構造であり、風景の魅力である。まず１つは、集落内でも通過交通のない、そこに住む住民だけの道の魅力である。こうした道はとくに狭く、車より人間のための幅になっていて、曲がりくねり、道に接した家屋、付属屋、畑、そして樹林と、魅力的な関係を取り結んでいる。２つ目は、集落の北西の境界に連なる樹林の魅力である。この樹林は、日光川から水田をわたって吹き付けてくる季節風、吹雪を防ぐ役割を果たしているのだろうが、それが集落の家々と一体となり魅力をつくっている。図は筆者のスケッチである。

図１　防風林と集落

・演習を迎える体制と地域づくりの体制

今年度の演習がもうひとつうまく行かなかったのは、教員が設定した枠組みのまずさにもある。学生たちが能力を発揮できるよう、来年度は誘導を工夫したい。ただしまた、演習が難しいもうひとつの理由がある。それは住民の方々の盛り上がりである。今回お手伝いいただいたのは、佐藤自治会長と池田善幸さんであったが、その他の住民の方とは、懇親会にお出でいただいた３人、公民館での発表会においでいただいた２人、計５人に過ぎない。演習への係わりが少ないということは、むらづくりへの係わりも少ないということである。住民が一致団結して村づくりに取り組めなくなっているとすれば、それだけ高齢化が進んでいるということか、とにかく将来を楽観できない状況なのは確かだと思われる。

５． 高齢化の進行、住民の団結とむらづくり

(1) はじめに

高齢化の問題は委託理由のなかに挙がり、ある意味最も鍵となるテーマである。しかしまた、これまでにも触れてきたように、問題は高齢化だけにあるのではなく、村を挙げて取り組むという体制が取れていないことにもあるのではないか。本章ではこの２つの問題を取り上げる。

まず、次節では人口統計から升田の高齢化について見ていく。ここでは若者がどれだけいるかも確認しよう。次に第３節では、集落の高齢化と村づくり活動の関係について山形県内の、あるいは東北の事例をもとに見ていく。そして、成功している事例では村を挙げて取り組んでいる所も確認する。

(2) 人口統計から見る升田の高齢化

村を挙げて芸工大を迎え、村づくり活動がもっとも活発だった平成１２（2000）年と比べ、どれだけ高齢化が進んだかを表８に見てみよう。残念ながら升田ではなく、旧八幡町と酒田市全体を比較した人口データだが、ある程度、升田の高齢化の状況も推測できる。旧八幡町は、平成１２年と平成２５年を比較すると、約１５％の人口減少が進んでいる。これを酒田市全体と比べると、酒田市は約１０％の減少だから、５％ほど多く、1.5 倍の早さだということになる。さらに山間にある升田の減少率はもっと大きいはずだから、2 割くらいの減少が考えられるのではないか。

次に旧八幡町の男女別の人口減少率を見てみよう。すると、男性の方が３％強高い。これは平均寿命の差によるものだろう。夫婦の年齢は男性の方が上で

あることが多いから、平均寿命の差と重なって、まず女性の１人世帯が増える。そして次に世帯が消滅し、空家が生じ、取り壊されると集落の風景も変わってくる。今のところ、旧八幡町全体では世帯数は微増であるが、間もなく減少に転ずるだろうし、升田はすでに減少しつつあるのではないかと想像される。

	旧八幡町				酒田市全体
	世帯数	男	女	計	
平成 12 年	1,990	3,597	3,958	7,555	122,248
平成 25 年	2,030	2,978	3,405	6,383	109,619
H25/H12	102.01%	82.79%	86.03%	84,49%	89.67%

表 8　平成 12 年と 25 年の人口比較（旧八幡町・酒田市）　出典：住民基本台帳

	男	女	合計
人口	113 人	129 人	242 人
世帯数			85 世帯
平均年齢	55 歳	65 歳	61 歳(平均)
1 人暮らし世帯	2 世帯	16 世帯	18 世帯
親子 2 人暮らし世帯			8 世帯
夫婦 2 人暮らし世帯			17 世帯
20 代、30 代	15 人	9 人	24 人
子どものいる 45 歳以下の夫婦 a			5 組
担い手候補　(30 代＋a)	15 人	16 人	31 人

表 9　升田の住民と世帯(平成 25 年)

升田の人口は 242 人、85 世帯である。女性の方が 16 人多く、平均年齢は 10 歳も高いが、20 代 30 代で見ると、逆に女性の方が少ない。１人暮らしは 18 世帯あり、ほとんど女性である。親子 2 人、夫婦 2 人の世帯はそれぞれ 8 世帯、17 世帯あるが、これらは今後 1 人暮らし世帯に移行する候補と看做せる。20 代 30 代の若い住民は 24 人いて、子どものいる 45 歳以下（どちらかが）の夫婦は 5 組ある。

さて、そうした升田で、村づくりの担い手になれそうな若手はどれくらいいるだろうか。20 代はまだ進路が決まっていない場合も多く、村を出て行く可能性があるのと、こうした山村社会で前面に出て活躍するには難しいと考え、45 歳以下の夫婦に、それ以外の 30 代を加えた住民を若手の担い手と仮定した。すると表のように、男性 15 人、女性 16 人を数えることができた。

平成１２（2000）年当時よりは減っているだろうが、まだまだ不足しているということは無いように思う。ただし、平均年齢 61 歳の村では、10 年後は限界集落の目安 65 歳を越え、70 歳を越えることも予想される。むらづくりの活動を起こすには、最後のチャンスと言えるかも知れない。

(3)　高齢化、結束力とむらづくり

高齢化が進めば地域づくり活動も難しくなる。地域づくりに成功している集落と住民の関係はどうなっているのだろうか。本節では山形県内を中心に、幾つかの事例は東北地方まで広げ、検討してみよう。また、住民の結束が強く、村を挙げてむらづくりに取り組んでいるところは、成功事例の中によく見出される。こうした事例にも触れて行く。

（ア）山形市上谷柏集落

村づくりのきっかけは、農地・水・環境保全向上対策である。平成１８年度、農水省は翌年度からの本格実施を前に、全国にモデル地区を選定したが、「上谷柏水土里育むみんなの会」もその１つである。担い手の中心は、旧南山形土地改良区（平成 11 年、最上川中流土地改良区に合併）の役員だった人たちであり、50 代、60 代である。筆者は休耕田にヒマワリを植える活動に学生とともに子どもも連れて参加したが、集落を挙げての催しで、昼からは公民館で弁当を食べての宴会となった。なお、芸工大の演習をここで行い、公民館で発表会を行ったが、このときも集落を挙げて大勢の皆さんにお出でいただいた。

写真 23　休耕田にヒマワリを

写真 24　植付

写真 25　昼からは宴会

（イ）西川町綱取集落

西川町は地区ごとに村づくり活動を行うよう行政として進めている。綱取はその中で先頭に立っている集落である。中心になっているのは 50 代後半、60 代の人たちで、農村公園整備、なめこ栽培などを集落挙げて行っている。写真は公益大の演習で訪れたときのものである。盛大な宴会になり、それ自体学生にとって貴重な経験だと評した参加教員もいた。

写真 26　演習合宿での宴会　　写真 27　公民館での演習発表会　　写真 28　なめこ原木栽培

（ウ）鮭川村木の根坂集落

朝日新聞にほんの里 100 選に選ばれた木の根坂集落は、11 戸 48 人の小さな集落だが、10 代が 4 人、20 代が 6 人、30 代が 3 人、40 代が 7 人もいる。最多の 50 代が 9 人である。廃校になった小学校を、中山間地域等直接支払制度を使って宿泊施設・蕎麦屋に改造した。集落を挙げて活動し、若い人が残り、戻ってきている。

写真 29　廃校を改装した宿屋　　写真 30　村総出で迎える　　写真 31　シドケ栽培

（エ）二戸市浄法寺町門崎集落

岩手県二戸市浄法寺町門崎集落は、40～50 代を中心とした担い手 10 名で村づくり組織設立の準備を始め、住民総出で集落を隅々歩くなど魅力と課題を点検した後、全 19 戸が参加する門崎むらづくり推進協議会を立ち上げた。そして 10 ヶ年計画をつくり、共同浴場付きコミセン（源泉はあった）や水車小屋をつくり、下水管を自ら敷設して全戸水洗化した。また、女性 10 名で設立し

た産直施設は一人当たり 300 万円の売り上げをあげ、4 人の若者（3 人は専業農家に）が都会からＵターンするきっかけとなった。平成 24 年度農水省豊かなむらづくり表彰事業天皇杯。

写真 32　総出で迎える

写真 33　産直施設

写真 34　雑穀が今では売りに

（オ）喜多方市高郷町揚津

会津大学と喜多方市、ＮＰＯ法人喜多方市グリーンツーリズムサポートセンターの支援のもと、棚田オーナー制を始めた揚津集落では、年７回のイベントで都市のオーナー１３組を迎える活動行っている。イベントの折の地元の食材によるバイキング形式の昼食が人気であり、その際には、これまで自家用にしか作っていなかった野菜を直売するようにもなった。本格的に稲作をやりたいと、２オーナーが喜多方に空家を求め２地域居住を始めた。農家民宿も始まりつつある。中心は 60 代の元区長、集落住民の若手市役所職員も重要な役回り。

写真 35　協議会会長

写真 36　人気の地元食材バイキング

写真 37　オーナー制の棚田

（カ）酒田市坂野辺新田

女性たちが産直施設いちご畑を立ち上げた。合併しないで独自の活動が盛んなＪＡ袖浦の農家から、イチゴ、カキ、花、そして葉物を中心に野菜が多数集まり、午後 3 時も過ぎればあらかた売れて品薄になる。中心となっているのは坂野辺新田の人たちで、村中がかかわっている。昨年、演習を行ったが、自治会館での発表会には多数の住民の方にお出でいただいた。

写真 38　いちご畑

写真 39　豊富な品物（もっと並ぶ）

写真 40　演習発表会

（キ）村山市上五十沢集落

平成 7 （1995）年から始まった上五十沢集落の村づくり活動は、茅葺の村で芸工大生が住民と行う活動として注目を浴びたが、現在、限界集落から消滅集落へと向かいつつある。平成 7 年の平均年齢は 62 歳であったが、平成 12 年頃までは集落総出の活動や、先進地視察旅行を行っていた。

写真 41　H8：餅つきで歓迎

写真 42　H10：総出で工事

写真 43　H25の雪で壊れた民家

６．　まとめ、そして次年度へ向けて

(1)　まとめ

玉簾の滝のライトアップを継続するための担い手グループの若返りをどう図るか、そして滝を見に来る観光客が滝を見るだけで帰ってしまうのではなく、升田に金を落として行くようにするにはどうするか、また、産直ららの売り上げ増加をいかに図るか、これらが委託理由であった。しかし、これまで見てきたように、もっと広く根本的なところから考える必要があると思われる。

平成１２（2000）年に出た活性化策のうち、玉簾の滝をライトアップするというようなイベントによる方法は、年輩の男性たち中心の、滝の里活性化委員会から出た案である。確かに人が集まるという即効性はあり、玉簾の滝の場合は成功したものに数えられるだろう。しかし、逆に言えば近視眼的でもあり、それが住民にとってどうプラスになり、村の存続にどう繋がるかを考えないと、単に集客だけで終わってしまう。玉簾の滝の場合、今それが問題になっているわけである。したがって、今それを考えるとき、金が落ちる工夫で済ませるのではなく、そもそも滝のライトアップが村づくりの中でどういう意味があるのかを問い直す必要があるだろう。

結論から言えば、滝のライトアップを否定することはないと思う。芸工大の学生も公益大の学生も、滝のライトアップを見て感動していた。しかし、村づくりの中で、滝のライトアップは「主」ではなく「副」に位置づけられるべきものだと考える。もっと大事なのは、平成１２（2000）年の活動当初に若手住民から出た、升田の自然の豊かさや日常の暮らしの魅力である。芸工大の学生も、公益大、山形大の女子学生も、そうした魅力、とくに後者の魅力に強く惹かれていた。3 泊 4 日、あるいは理想的にはもっと長く滞在する中で、のんび

りと升田の魅力を味わい、その中のアクセントとして滝のライトアップ見学がある、こうした方向が目指されるべきだろう。産直ららにについても同様である。たんに売り上げを伸ばす方法を考えるのではなく、升田の住民にとっての産直の意味を考えるべきである。産直が大きな副収入となるのを聞き、後継者が 4 人も都会から戻ってきた二戸市門崎集落のような事例もある。しかし、良くあるのは、自家用につくっていた野菜を出したら売れるので、だんだん張り切って様々に売れ筋を工夫し、次々と畑を増やしたというおばあちゃん達の話である（櫛引のアグリなど)。アンケートによれば、米を出荷している家は半数弱になってしまっているが、自家用の野菜をつくっている家はまだ4割ある。産直に野菜を出せそうな家は、アンケートで見る限り 9 割近くにもなるのではないか。門崎集落の場合、10 名の女性たちが産直をまず立ち上げ、その後村中で出荷する形に持って行ったと思われるが、升田でも、もう一度考え直すべきではないだろうか。

(2)　次年度に向けて

今後は以下のような取り組みが必要であるだろう。まず、平成 12（2000）年に村づくりを始めた当初にあった「自然の豊かさ」や「日常の暮らし」、それが積み重なったものとしての「歴史と文化」を、升田の魅力として評価し、そこから升田に住むことの意味を確認し、同時に外から人を迎えるという取り組みを、もう一度原点に返ってやり直すということである。これは平成 16（2004）年まで芸工大の夏合宿という形で追及されたが、酒田市との合併を機に消えてしまっている。

次に、村を挙げて全住民が取り組むという体制をもう一度組み直すことである。平成１２（2000）年に芸工大を迎えたときは、そういう体制が取れていた。

それが芸工大生の感動を呼んだことが彼らが書いた報告書から分かる。しかし、この体制はこの年だけだった。翌１３年からは、一部の有志だけで学生たちを迎えることになったし、玉簾の滝のライトアップにしても、産直ららにしても、関係者が固定され、一部の人の取り組みになってしまった。前章で見たとおり、成功している集落は、村を挙げて取り組んでいる。平均年齢から考える限り、筆者の村山市上五十沢集落での経験から、まだ５年は大丈夫であると言えそうだ。しかし逆に言えば、あと５年しかないし、それが最後のチャンスと言えるだろう。

さて、ただ、どうしても無理だと言うなら別の方法もある。前章では取り上げなかったが、個人が企業的に産業展開を図り、升田で暮らしていくという在り方である。筆者の知っている例では、上山の果樹地帯はそのような村である。新宿のタカノや銀座の千疋屋と直接取引している農家とか、JR 東日本とも懇意にして観光客が訪れる農家とか、大手コンビニチェーンと契約してサクランボやラ・フランスを卸している農家とか、それぞれが工夫して農業だけでなく商売としてやっている。そういう村では一致団結して村づくりをするのではなく、皆がライバルである。積極的展開をしている農家は市場へは卸さない。直接取引先を持ち、あるいはホームページを見て注文してきた客に宅配便で全国発送している。住民が一致団結してのむらづくりが無理なら、こうした道しかないし、池田さんのバラ園や村上さんの缶詰工場のある升田は、すでにこうした方向に進みつつあるのかも知れないが・・・。　ただ、とりあえず、今は村を挙げてもう一度取り組むことを第一にお勧めしておく。この報告書を読み、議論していただき、どうしても駄目なら後者の道だろう。

さて、前者の方法をとると仮定して、もう１つ言っておきたいことがある。それは外部の人を呼び込むことを考えて村づくりをすることである。呼び込む

とは将来移住してもらうことを念頭に置いてということであるが、そうしておかないと、村づくりが村の存続に結びつかない。これは村山市上五十沢集落の村づくりに関わっての反省だが、一時は盛り上がっても、やがて皆年老い限界集落から消滅集落へと進んでしまう。後継者の中に住みたいという人がいれば良いのだが、おそらく足りないだろう。ただ、上五十沢の村づくりは失敗だったかというと、必ずしもそうとだけ断定できない面はある。村の存続を目標とすれば失敗なのだが、住民の過半数は当初からそうは思っていなかったかと思われる。多くの住民は、限界集落化することは初めから認めて諦め、自分の子どもたちが出て行った村に学生たちが来てくれ、賑やかになるのを喜び、マスコミに取り上げられ、良い所だと書かれることで誇りを持って老後を過ごせた、それで満足だったのではなかろうかと思われる。それ以上は望まない人の方が多かった。では升田はどうなのか。ここでも村づくりの目標をはっきりさせる必要がある。

(3)　具体的に、次年度に向けて見つけた取り組みの芽

最後に、升田で見つけた次年度以降に繋がる可能性の芽について触れて稿を閉じよう。

- **高橋一登さん**

高橋さんと初めてお会いしたのは学生と訪れた９月の合宿の時である。配布してあったアンケートを回収するなかで、菊地講師が高橋さんと出会い、合宿所(滝の里ふれあい館)にすごい人がいると言って帰ってきた。もう一度会いに伺いたいと連絡すると、子どもを連れて合宿所までご夫婦で来てくれた。

高橋さんがなぜすごいかと言うと、専業農家として、升田に住むことの意味を積極的に見出して暮らしていきたいと真剣に考えているからである。ご夫婦

とも一度庄内の外に出て、それから戻ってきた。一度外に出ることで見方が変わったと言う。今回の委託事業は若手の担い手を探すことであったから、最初から若手の住民に会いたいと、市役所の担当者にも、区長さんや升田の人にも言ってきた。ところがなかなか会えず、結局高橋さんが唯一出会えた、村に暮らすことに積極的な意味を探している若手住民であった。

高橋さんには２月に大学に来ていただき、もう一度お話する機会を持った。そのなかで来年度の演習でご協力いただく企画が決まったのだが、それは次のようなものである。５月に家の周りに山菜が出てくるから、それを採って、料理してみよう。高橋さん自身、升田に戻ってきてから山菜に改めて興味を持ったそうで、それまでは山菜と知らずに草刈りしていたと言う。そういう山菜を、遠くまで採りに行ったりせず家の周りで採り、みんなで料理して食べてみる。これは芸工大の学生たちが一番やってみたいと言っていた、のんびりゆったり過ごし、住民の方とお話しながら、自然の恵みに富んだ升田の暮らしを味わうという過ごし方そのものではないか。こうした所に、現代の先端と交錯する高橋さんの感性を感じる。５月を楽しみにしよう。

- **池田みつ子さん**

池田みつ子さんは、毎回お世話になっている池田善幸さんの奥様であるが、２月にお宅に伺って初めてお会いした。伺った理由は、不登校の子に、親子で滝の里ふれあい館に住んでもらい、自然豊かな環境で生活するうちに社会に復帰できるようになる、そうしたプログラムを温めていると聞いたからである。みつ子さんは小学校に勤め、校長の経験も長い。定年を迎えた今、教師仲間とこうしたフリースクール兼暮らしの場を、升田につくってみたいと考えている。

さて、せっかく整備されたのにほとんど使われていない滝の里ふれあい館の活用計画としてたいへん興味深いものであるが、当日私が惹かれたのは別の話

だった。それは家の前の道を、その先の畑に行くためにおばあちゃん達が通るので、その目に見える範囲を美しく綺麗にしようと色々やっているという話である。余計なものは取り除き、ゴミを片付け、草取りをし、生け垣の剪定をする、そうした作業である。私が感心し、興味を覚えたのは、これは芸工大の学生達が升田で感動したものに挙げている住宅や庭、家並み、曲がりくねった道そのものだからである。実はその話を聞く前から伏線はあったのだ。まず、生け垣の続く道が雰囲気のある魅力的な道だったこと、そして門の前に立ち屋敷を一望したとき、まず感動した。なんと立派で美しい屋敷構えだろう！　そこには正面に母屋があって、その前には農家特有の南側の広い庭があり、両側には付属屋が控え、庭木や屋敷林と一体になった素晴らしい風景があった。そして家の中に入り、応接間に通されると、これもまた素晴らしい建築である。天井が一段高く、縦横に飛ぶ梁が見えている。こういうつくりは、富山県の民家で一度見たことがある。富山ではそれを呼ぶ呼び名があったはずだが思い出せない。建具もケヤキの一枚板を使った立派なものが３面に入っているのだが、

写真 44　梁の飛ぶ天井

写真 45　庭を見せるための全面ガラスのサッシ

感動の理由を分析すれば以下のようになる。第一に挙げなくてはならないのは、住人が建築の魅力をよく理解して大事に維持管理し、傷めば丁寧に修復し、そして行きとどいた掃除が為されていること、そしてそうした空間で暮らすことに喜びを感じ楽しんで暮らしていることである。そうした空間に招き入れられるので、客は感心するし居心地が良いのである。ソファーから外を眺めると、

庭から玉簾の滝まで見えると言う素晴らしい風景が広がっていた。

　それは、そのために床から内法まで１枚のガラスでできたサッシを選んでいるからである。要するに、全てが美しく魅力的に設計され、整えられているのだ。そして、それを行っているのは奥様のみつ子さんだろうと推察する。玄関から左側は現代的に直したと言うが、帰りにチラッと覗くと、これはまた現代的で快適な生活ができる美しいダイニングルームであった。

　自分の住んでいる環境を見つめ直し、評価し、そして美しく整えること、それは升田の魅力を発見すること、住み続ける意味を見出すことの第一歩である。学生たちに池田さんの屋敷を見せれば、自分もこんなところで暮らしてみたいと言うだろうと思われる。まずはそうしたところから、升田の村づくり、村の存続について考える必要があると思うのである。次年度の演習では、学生たちに道の掃除をさせよう。